# 要約

王麗

本論文の目的は、景徳鎮の製磁技術を製土技術（第二章）、成形技術（第三章）、装飾技術（第四章）、焼成技術（第五章）に分化して検討し、これらの技術について中国、日本、欧米の文献資料と現代における民俗学的なフィールド調査によって得た資料と比較して、各技術の変遷の状況を明らかにすることである。

第一章では製磁技術について文献資料を収集し、その分類、整理を行った。それらの資料の持つ特徴を考察し、信頼性がある資料を抽出し、後の章で分析するため歴史的な位置づけを明確化した。考察の結果、『中国陶磁見聞録』、『陶冶図説』及び『清国窯業調査報告書』を代表的な文献資料として抽出し、第二・三・四・五章で扱うことにした。

第二章では、製土技術の変遷を採掘技術と精製技術に分けて論じた。さらに、精製技術の変遷について、粉砕、水簸、土の成形に分けて検討し、その施設及び道具についても考察した。その結果、作業の流れや施設からみて、現在の精製技術は、清代の記録及び北村の記録（1908 年）と一致することが判明し、「製土技術における完全伝承」という状況が指摘できた。但し、採掘技術、沈澱用の丸型の攪拌溜、漉込溜の利用技術については現在では伝承されていない技術であると考えられる。

第三章では円器の成形技術の変遷を水挽き技術、型押し技術、削りしあげ技術、型作り技術、成形道具の変遷に細分化し、考察した。水挽き技術の変遷については、職人の作業の様子、技術のポイントを考え、姿勢、輪車の動き方、坯土の置き方、指の動き、水挽品を取り方、水挽品を置き方、収縮の判断の面から全面的に考察した。その結果、機械陶車による水挽き技術産業の現場では伝承されなかったが、観光実演において完全伝承されていることが明らかになった。また、水挽き時におけるの置き方については置く空間が拡大していることがわかった。

型押し技術の変遷については、型の材質形と寸法収縮から職人の生産状況まで多方面にわたり検討した。その結果、観光実演の現場において土型は碗用しか使用されなくなっていることが判明した。本章の最後には型押しのための水を塗布する技術、型押し用の陶車の使用技術、二回の仕上げといった技術は、現在では伝承されていないことを明らかにした。

最後に削り仕上げ技術の変遷について、荒削り、高台削り、削るための水を塗布する技術のポイントを考察した。成形技術を支える道具の変遷については、特に陶車の変遷について詳しく論じた。

第四章では、装飾の技術、特に施釉の技術と絵付け技術の変遷を論じた。釉かけ技術の変遷については各種類の釉かけ方法を全面的に考察した。結論として、盪釉、蘸釉、刷釉、交釉は現在において観光の実演として行われているものの、産業現場では全体的に衰退傾向にあるといえる。また元明時代の製品を擬古品として複製するため、その技術を使う場合も多くあることが判明した。吹釉は、ポンプ機の利用が一般的となっている。一方、碗における二回の釉かけ技術、口で釉薬を吹く技術は伝承されなかったことが判明した。

絵付け技術の変遷については、筆をもつ、絵を写す、線描き、染めるという技術を中心に考察した。その結果、線描き、染める技術も現在まで完全伝承されていることが明らかになった。また絵付け技術においては、絵を写す時に、新転写紙を利用するようになったことがわかった。

第五章では、焼成技術を匣鉢詰め技術、窯詰め技術、本焼技術に分けて、その変遷を全

面的に考察した。とくに匣鉢詰め技術のポイントである入れ方、力の加減、中の入れ物について論じた。窯詰め技術については、特に空間位置、位置管理に考察を加えた。

また本焼技術について、焼火時間、焚口を閉める、下燃し、本燃し、焼成火候、テストピースを取り出す、灰を取る、窯だし、本焼の後の面から論じた。加えて、景徳鎮における伝統的焼成道具の全体像を確認し、代表的な窯道具である柴窯の変遷を分析した。

その結果、焼成技術には一度消滅したものが復活したという特徴があり、全体としては、変化しながら伝承されてきたと考えられる。

以上の考察から、次のように結論づけることができる。すなわち、「製土技術」（第二章）は、完全に伝承された技術と伝承されなかった技術という 2 種類の伝承状況によって構成されている。「成形技術」（第三章）と「装飾技術」（第四章）は、完全に伝承された技術、変化しながら伝承された技術、伝承されなかった技術という 3 種類の伝承状況で構成されている。「焼成技術」（第五章）は、変化しながら伝承された技術、伝承されなかった技術という 2 種類の伝承状況によって構成されていることが分かった。

つまり、現在までの景徳鎮の製磁技術の変遷の状況は、完全に伝承された技術と変化しながら伝承された技術、伝承されなかった技術という重層性を持つという特徴が、それぞれの技術ごとにおいて共通してみられる。

さらにこのような重層性が現れる要因について、消費者側、生産者側の視点から考察した。消費者側においては、民衆の好みの変化、擬古（複製）品愛好者層の存在、観光客のニーズに応じる技術の資源化という三つの要素が重層性に影響を与えている。また生産者側において重層性を支えているのは、現代的な設備と伝統的技術の双方を活用する職人や技へのこだわりを強く持つ職人など多様な生産者の存在が重要な要素となっていることが明らかになった。

景徳鎮において、その伝統製磁技術の変遷には重層性という特徴が存在するため、この伝統製磁技術を未来へ向けて伝承するには、若手技術者の育成においても伝統的な徒弟制度と学校教育をあわせた重層的な教育が必要になると考えられる。これからの課題として、技術者育成へ向けた具体的な方法の探索を継続したい。